

京の大人の英知、注入マガジン

京都CF

[シー・エフ]

BACK ISSUES

お近くの書店でお求めになれない場合、ご希望の号数と部数をお電話もしくはファックスにてフェイム事務局までお申し込み下さい。在庫の確認をさせていただきます。その後、代金と送料を切手でお送りいただければ、到着し次第ご送付いたします。ホームページからもお申し込み頂けます。

No.261

2005.9月号



特集
ウチら、平成居酒屋

定価350円
(送料100円/1冊の場合)

No.260

2005.8月号



特集
先斗町、ウエストサイドの、舞台裏
裏床・先斗町

定価350円
(送料100円/1冊の場合)

No.259

2005.7月号



特集
I♥お肉

定価350円
(送料100円/1冊の場合)

No.258

2005.6月号



特集
NO カレー、
NO LIFE

定価350円
(送料100円/1冊の場合)

年間定額購読

1年間分の「京都CF」を銀行引き落としにて、4,200円(内、消費税200円)で予約購読していただけます。お電話もしくは巻末ハガキにてご連絡ください。改めてお申し込み用紙をお送りいたします。

フェイム事務局

〒604-8134 京都市中京区六角通丸太町九丁目大塚ビル2F

TEL. 075-256-7558 FAX. 075-256-7557

ホームページからもお申し込み頂けます。

<http://www.kyotocf.com>

こつそり部屋の本棚におきたくなるバックナンバーです。



錫職人

山中純平

YAMANAKA ZYUNPEI

【プロフィール】「清課堂 山中源兵衛」の7代目として1969年、寺町に生まれる。「樹っこが生えるくらいベタベタの京都人(笑)」とは本人談。錫職人への道を決意後、府の育成プログラムに参加。1年間修業を経て、地下工房の主となる

京 TIAN I.D.
キョーティアンアイディ
The 122th person

錫器がいい人に嫁いでいく幸福感 そのためだけに動かされる手の平



二大柱のひとつ「酒器」。鋳は酒と切っても切れない縁を持つ。島崎藤村も「祝いの酒は香りにあふれ、錫の提子(ひさび)をひたしけり」と歌ったほど。「杉目織口」4725円。「不昧公好子持(小)」278350円など



もうひとつの柱となる「茶器」。錫は酸化着色しにくい金属のため、灰色がかかった緑色の古美色は茶の世界で非常に珍重されたとき、「富吹茶入」1万4700円。「宝珠木瓜形托子」3万7800円のほか、魚壼や壺、茶約なども



控えめな打りの中、キラリ輝く錫の器たち。酒器や茶器以外にも、花器や食器、煙管、耳飾などが並び、眺めているだけでうっとり。店奥には茶室を改装したギャラリーがあり、若手金工家の展覧会も開催される

information

清課堂 山中源兵衛

■京都市中京区寺町通
二条下ル妙満寺前町462
☎075-231-3661
◎10:00~18:00/日・祝日休
<http://seikado.jp>

「清課堂 山中源兵衛」の創業は天保9年(1838年)。167年の歴史と伝統を背負う錫器の老舗だ。となれば、その稼業を継ぐ者はさぞかし大変では?と考えてしまう。しかし、純平さんに会えばそれは愚問だと痛感する。「今も家を継ぐといった大層な覚悟はないですよ」と、朴訥とした様。1日5~6時間、工房にいる間は、ただただ無心に錫と向き合っている。目の前にあるモノに意識を集中し、納得のいく器をつくり上げる姿勢は、ニュートラルでビューアでもある。先細りしていく業界の有り様に危機感を抱きながら、モノづくりを続けていくため、「生き残る手法を常に考えている」という純平さんの真摯な瞳と真正面からぶつかったとき、穏やかな意志を感じたのは錯覚ではあるまい。今の世の中、モノが溢れすぎている。ゆえに、「もったいない」という感覚が欠落している人の多いことが、彼は悲しい。いや、がっかりしていると言った方が適切か。「半分諦めてるんですよ」とは純平さんの口から出た本音。「指輪をじゃらじゃらつけた手で器を持たれるのは嫌なんです」と、強い口調。錫はツメで引っ掻いても跡が残る繊細な金属。それを知らずしても、愛情を持って扱ってもらいたいと思うのは道理だ。しかし、諦めているのはまだ半分。残り半分で、モノそのものの価値を彼は信じているのかもしれない。

錫職人にならなかったら?との問いに「クルマの整備士」と即答。どうやら余程のクルマ好きらしい。バンダなどの年季の入ったボロボロの古いクルマをこよなく愛し、手入れを繰り返しながらあと30年は乗るつもりだと胸を張る。長年、大切に使うという点ではクルマも錫器も同じ。「錫のひとつだけ好きなところは、色。毎日使っているとちょっとグレーがかった緑になる、その風合いが魅力」。ひとつだけ、なんて言っても、それは長い年月の積み重ねで生まれる色味。ならば、その色を好む気持ちは錫そのものを好むということではないか。少々、乱暴な3段(2段だが)論法か。酒を美味しく呑むための器、茶葉の味を損なわないように重宝された錫の器。それらは自然と日常生活に溶け込んでいたはずだ。現在のアルミニウムやステンレスの如く。だからといって、全ての器を錫にしらなんて横暴なことは言わない。錫がベストだとも思わない。ただ、巡り逢った錫器をひとつ、陶磁器やガラスと同じように「コレクション」に加えてもらえれば…。そう、それだけで彼は満足なのだ。